



ショートコメント

★★★

Data 2022-5

監督：イム・デヒョン
 出演：キム・ヒエ／中村優子
 ／キム・ソヘ／ソン・ユビン／木野花／瀧内公美／薬丸翔／ユ・ジェミョン

ユンヒへ

2019年／韓国映画
 配給：トランスフォーマー／105分

2022（令和4）年1月11日鑑賞

シネ・リーブル梅田

◆2020年に、「韓国のアカデミー賞」ともいえる青龍映画賞で最優秀監督賞と脚本賞をW受賞したのが本作。その監督・脚本は長編第2作となる新鋭のイム・デヒョンだから、こりゃ必見！しかも、岩井俊二監督の『Love Letter』（95年）にインスパイアされたという本作のロケ地は北海道・小樽だから、美しいに決まっている。こりゃ必見！

そう思ったが、本作のテーマは「これまで韓国では正面から描かれることが少なかった中年女性の同性愛と彼女たちが経験してきた抑圧」だと知り、アレレ。こりゃ、ちょっとややこしそう・・・？

◆あなたは私のことを忘れてしまったかも。もう20年も経ったからー。本作のストーリーが動き出すきっかけは、そんな書き出しから始まる一通の手紙を、韓国で暮らすシングルマザーのユンヒ（キム・ヒエ）が受け取ったところから。そんな母親への手紙を盗み見てしまった高校生の娘・セボム（キム・ソヘ）は自分の知らない母親の姿をそこに見つけ、手紙の差出人である日本人女性・ジュン（中村優子）に会わせようと決心し、さまざまな画策をすることに。

なるほど、なるほど、こりゃいかにも女性監督の好きそうなテーマと脚本だが、私にはイマイチ。

◆近時観た、濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』（21年）（『シネマ49』12頁）、『偶然と想像』（21年）の“会話劇”は面白かった。また、ホン・サンス監督の『逃げた女』（20年）（『シネマ49』341頁）、『カンウォンドのチカラ』（98年）（『シネマ49』346頁）、『オー！スジョン』（00年）（『シネマ49』350頁）等の会話劇もすべて面白かった。それに対して、ナレーションを多用する本作は・・・？

ストーリーを引っ張っていくのは行動力のある現代っ子セボムだが、彼女の知恵は一体どこまで・・・？セボムに強引に誘われたことによって、ユンヒは今、雪の小樽の街に立っていたが、彼女はそこで一体どんな新発見（再発見）を？悪くはないが、私には本作はイマイチ・・・。

2022（令和4）年1月13日記